学校におけるユニバーサル型空間の意義

―社会モデルの視点から捉える「オルバ」の居場所を超えたユースワーク―

The Significance of Universal Spaces in Schools: Youth Work Beyond "Oruba" as a Place to Belong from a Social Model Perspective

山村 和恵・大月 隆生・武石 卓也
YAMAMURA Kazue, OTSUKI Takao, TAKEISHI Takuya

立命館守山中学校・高等学校
Ritsumeikan Moriyama Junior and Senior High School

Key words：社会モデル，ユースワーク，居場所

背景と目的

学校の授業や行事における標準化されたルールや集団規範は、生徒の自由や参加を制約することがある。こうした生徒への対応として、教室以外の滞在空間を校内に設ける取り組みが広がっている［１］。

しかし、利用対象を限定する場では、利用生徒を「支援を必要とする生徒」としてスティグマ化する可能性があるうえ、既存の学校生活への適応を目的にすれば、生徒の困難を個人化しかねない［２］。

そこで、本校では「いつでも、だれでも、理由なく過ごせる」居場所として「オルバ」を設置し、ユースワーカー２名が関わってきた。

本発表では４年間の実践を振り返り、居場所としての「オルバ」の意義をインクルーシブ教育の文脈で考察する。

実践の概要

当初は、「サポートルーム」と言う名称で開始したが、利用者のスティグマ化や一方向的な支援関係という印象を見直すため、「オルバ」と改称した［３］。

当初は保健室を経由した利用が多かったが、認知が高まるにつれて、自ら足を運ぶ生徒や学年の教員から紹介されることで利用する生徒も増えている。

オルバは、その理由を問われることなくそれぞれの目的で利用でき、生徒一人ひとりの権利を尊重する。常駐するユースワーカーは信頼関係に基づく対話を大切にし、生徒の疑問や葛藤をともに考えたり、学年を越えた交流を支えたりしながら、教員・保健室・ソーシャルワーカーとも連携する。

考察

1. 社会モデルの視点でとらえるオルバ

障害の社会モデルの視点に立てば、生徒を既存の学校生活に適応させることではなく、学校が当然としてきた制度・環境・規範と、生徒の権利や参加の制約との関係を可視化する契機となる点にオルバの意義がある。

オルバの実践は、生徒個人が学校に適応することを目的とするのではなく、学校に存在する社会的障壁を発見し、その解消を学校の側の課題として捉え直す契機となりうる。

2. インクルーシブ教育の視点でとらえるオルバ

インクルーシブ教育は、すべての子どもの教育を受ける権利の保障に向け、多様性を前提に学校を変革していく「ゴールのないプロセス」である［３］。

オルバは、生徒が教室外で過ごす選択肢の保障であると同時に、ユースワーカーとの対話や生徒同士の交流を通じて、学校生活で生徒に内面化された規範を相対化する機会や、生徒の新たな人間関係を築く機会としても機能している。

オルバは、特定の困難を抱える生徒を選別するのではなく、誰もが利用できる空間として位置づけることによって、利用に伴うスティグマを緩和するとともに、多様な生徒の学校生活への参加や心理的安全性が保障される可能性を広げる。

課題と今後の展望

第一に、利用者の増加に伴い、静かに過ごしたい生徒と交流を望む生徒のニーズが衝突し、「誰でも使える」場が「行きづらい」場へ転じる危険がある。生徒の声を踏まえ、空間と利用方法を継続的に調整する必要がある。

第二に、教室以外で過ごすことと学習機会の保障を両立させる仕組みが課題である。

第三に、オルバが困難の受け皿にとどまらないよう、そこで発見した障壁を学校全体の文化・方針・実践の見直しにつなげたい。インクルーシブ教育を終わりのない実践と捉え、変更と再検討を重ねていく。

参考文献

［１］文部科学省（2025）「誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策推進本部（第５回）」https://www.mext.go.jp/b_menu/activity/detail/2025/20251106.html（2026 年 10 月 21 日閲覧）.
［２］桜井智恵子（2021）『教育は社会をどう変えたのか』明石書店.
［３］山村和恵・上田隼也（2026）『デジタル保健室　学校からひろがるケアリング・ムーブメント』紫洲書院，36-39.
［４］野口晃菜（2024）「多様な子どもの権利を保障するためのインクルーシブ教育」末富芳編『子ども若者の権利と学び・学校』明石書店，59-79.